旧石器時代

日本人の生活の始まり

日本列島において人類が生活を始めたのは、まだ大陸と陸続きであった今から四万年程前だと言われています。主に打ち欠きによって作られた石器（打製石器）を使用していたため、その頃から、土器が使用されるようになる約一万数千年程前までの時期を「旧石器時代」と呼んでいます。「先土器時代」「無土器時代」とも呼ばれ、昭和二四年（一九四九）の群馬県岩宿遺跡における打製石器の発見によりその研究が発展したため「岩宿時代」と呼ばれることもあります。

初めは、川原石などの自然石を打撃具などとして使用したようですが、石の割れ目を刃物として用いるようになります。割れて剥がれた破片（剥片）や残る石の芯部分（石核）などを用いて、土を掘ったりする斧状の道具、槍先につけた狩猟用の道具、動物の皮や肉を切ったり木材を加工したりする刃物状の道具など、様々な石器が作られました。そうした「打製石器」や動物の骨や角から作られた「骨角器」などを使い、狩猟や採集活動を行って生活していたものと思われます。

気候変動の激しい時代であり、住居などの建物跡や炉の痕跡が確認されている事例もごくわずかです。一般的には定住はせず、洞窟や岩陰を利用したり、テントのような軽易な住居を設けるなどしながら、食料となる獲物や木の実などを求めて、移動生活をしていた時代と思われます。

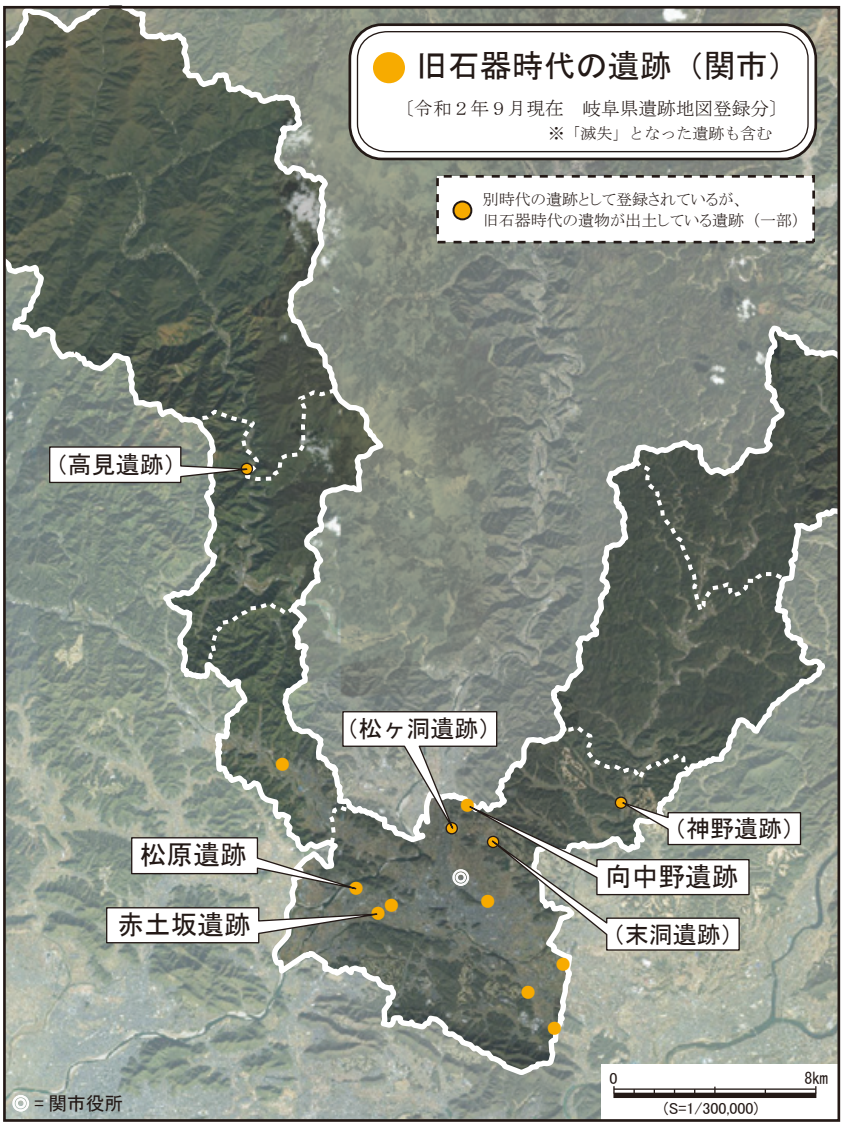
旧石器～縄文時代の生活（想像図）

打製石器〔ナイフ形石器〕（末洞遺跡）

関市の旧石器時代

岩宿遺跡発見の数年後、昭和二八年（一九五三）に、岐阜県内でも富加町の恵日山遺跡が県内最初の旧石器遺跡として発見されました。関市内においても、昭和三八年（一九六三）に赤土坂遺跡（巾）で調査が行われ、その後も各地で旧石器時代の遺物（石器）や遺跡の発見が報告されています。令和二年九月現在、関市内における旧石器時代の遺跡は、赤土坂遺跡や松原遺跡（小屋名）など、左図九地点が登録されているにすぎませんが、松ヶ洞遺跡（下有知）や高見遺跡（洞戸）など、別時代の遺跡として登録されている場所でも打製石器は出土しており、その他、遺跡外の場所でも数多く表土採集されています。

住まいなどの生活の痕跡はなかなか発見されませんが、長期の定住生活が行われず、獲物や木の実を求めて移動しながら生活していたと思われる時代であったため、山水に恵まれ自然豊かな関地域には多くの人々が往来していた可能性も十分に考えられます。今後の調査や発見に期待がもたれます。



※　遺跡名は、図録や展示で紹介している遺跡のみ表示しています。

旧石器

縄文

原始

弥生

3　4　5

古墳

6

7　（飛鳥）

8　奈良

9　10　11　12　平安

古代

13　鎌倉

14　南北朝

15　室町

16　安土桃山

中世

17　18　江戸

19

近世

明治　大正　20　昭和　平成　21　令和

近・現代

市内最古の石器!?

「打製石器」は、旧石器時代から縄文時代にかけて使われており、金属器が使われるようになる弥生時代以降は減少していきます。

旧石器時代前半の打製石器は、石を打ち欠いただけの大きめの礫（礫器）や小型の剥片を用いており、神野遺跡で出土した礫器や、松ヶ洞遺跡で出土した握斧状の石器は、約３万年以前のものである可能性が推測されています。

礫器（神野遺跡）

握斧状石器（松ヶ洞遺跡）

旧石器時代後半になると、鋭利な刃部をもつ剥片（石刃）を生かして加工・成形が行われるようになり、「ナイフ形石器」を中心に多くの石器が造られます。主に加工具として用いられたようですが、先端を尖らせた尖頭器などは槍先に付けた狩猟用と思われます。

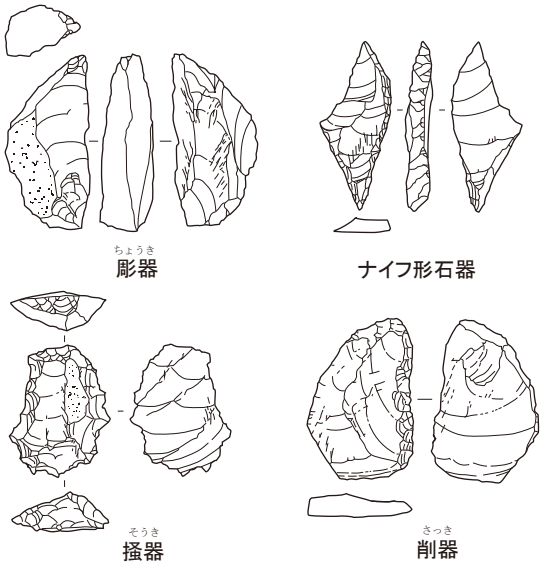
旧石器時代末期からは、刃部などにさらに細かい加工・調整を加えた薄手で小型の「細石器」（細石刃・細石核）が造られるようになり、縄文時代の石鏃（矢じり）や石匙など多様で精巧な石器へと進化していきます。

赤土坂遺跡（中三丁目）

津保川右岸の段丘上に位置する遺跡です。昭和三七年（一九六二）の赤土採取中に石器が発見されたため、南山大学及び岐阜県立関高校社会研究部によって発掘調査が行われています。

鋭い割れ目を刃としてナイフ形に成形した「ナイフ形石器」が三〇点以上出土したほか、尖頭器状に成形した角錐状石器、成形は粗いものの割れ目の刃部をもつ彫器、二次加工で側縁の刃部を整えた削器（サイド・スクレイパー）、端部にも刃部を有するヘラ状の掻器（エンド・スクレイパー）など、様々な種類の石器が採取されています。

これらの石器が出土した層では土器は出土しておらず、旧石器時代後期、一万六千年前頃の土層と推定されています。



打製石器（実測図）

0　5cm

向中野遺跡（下有知）

打製石器（表土採集）

関ノ上団地の東側、美濃市境にかけての山麓に広がる遺跡です。古墳時代の竪穴建物や中・近世の溝なども確認されている複合遺跡ですが、ナイフ形石器を中心に、角錐状石器、彫器、削器、細石刃、細石核など、赤土坂遺跡に次ぐ量の石器が採集されています。

松ヶ洞遺跡や末洞遺跡を含めた下有知北部の丘陵地は、赤土坂周辺・田原地区と共に、旧石器時代の遺物が多く採集されている地域の一つです。

松原遺跡（小屋名）

打製石器（第1次調査出土）

塚原遺跡公園の対岸、長良川左岸の段丘上に広がる遺跡です。これまでに一八次にわたる調査が行われており、縄文時代や古墳時代の竪穴建物、中・近世の土坑などが確認されています。

平成四年（一九九二）の第一次調査では、ナイフ形石器、削器、掻器などが出土しています。調査地周辺ではそれまでにも、縦型石刃を生かした小型のナイフ形石器や打製石斧などが採集されています。

縄文時代

土器の製作と定住生活

今から一万年程前に、日本列島は大陸から完全に分離し独立した島国になりました。それより少し前の一万数千年前頃から、日本では「土器」が製作され使用されるようになります。自然物を加工する石器に対し、土を焼いて固くする土器の製作は、物質の変化を活用するようになった人類の進化を示し、生活を大きく変えました。

明治一〇年（一八七七）、東京都の大森貝塚において縄目の文様のついた土器が発見され、日本の近代考古学の端緒となりました。その形状から「縄文土器」と呼ばれましたが、その後全国各地で発見されているこの時代の土器には縄目の文様がないものも多く、一般的には「縄文時代に使用されていた土器」全般を示しています。

石器も使用され、狩猟・採集の生活は続いていましたが、最後の氷期が終わり地球の気候も温暖化してきた時代であり、動植物相も変化しました。大型動物を追い求めて移動した生活から、近隣の中小動物や植物を食材とするようになります。土器の使用により、食料を焼くだけでなく煮て食べるようになり、水や食料の貯蔵も可能になるなどして食生活も安定しました。この時代の遺跡では、炉や柱穴を伴い住居と思われる「竪穴建物」、倉庫などの「掘立柱建物」、ゴミ捨て場と思われる「貝塚」なども見つかっており、定住して生活するようになった時代です。

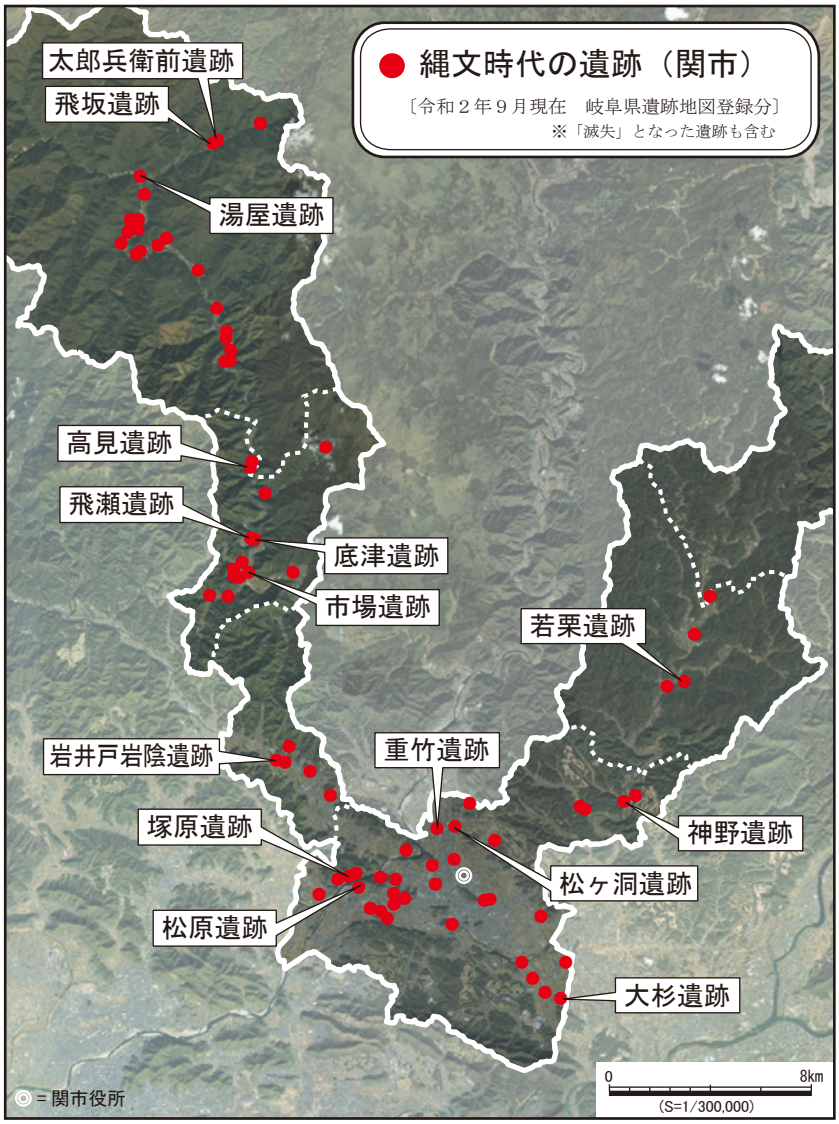
土器の使用が始まる一万数千年前から、稲作が広まる数千年前までの時代を、「縄文時代」と呼んでいます。

塚原遺跡公園
上：縄文土器　下：掘立柱建物と竪穴建物（復元）

関市の縄文時代

遺跡地図における登録遺跡は、七九ヶ所と大きく増加します。中でも、板取川・武儀川・長良川・津保川などの河川に沿って遺跡が多く存在しています。動物や木の実などの山の恵みと、魚や貝及び生活用水としての川の恵みを得られる谷あいや山麓の河川沿いに人々は住むようになったものと思われます。

遺跡公園として整備された塚原遺跡（千疋）を始め、重竹遺跡（下有知）や大杉遺跡、板取の太郎兵衛前遺跡（門原）や飛坂遺跡、洞戸の市場遺跡や底津遺跡（栗原）など、多くの箇所で縄文時代の住居跡と思われる竪穴建物が確認されています。現在のところ、上之保や旧武儀町、武芸川町では住居跡は見つかっていませんが、上之保の鳥屋市や川合では石器や縄文土器が採集されており、武芸川町の岩井戸岩陰遺跡（谷口・小知野）では岩陰に石器製作の場が残るなど、各地に生活の痕跡は残されています。市域の広い範囲で、縄文人の生活が営まれていたものと思われます。



※　遺跡名は、図録や展示で紹介している遺跡のみ表示しています。

塚原（つかはら）遺跡（千足）

千足大橋の約七〇〇m上流、長良川右岸の南向き緩斜面に位置します。昭和二九年（一九五四）以降の調査により、縄文時代の屋外炉や集落跡に加え、古墳時代後期の群集墳も残る良好な複合遺跡であることが判明し、史跡公園として整備・保存されている遺跡です。

縄文時代は、主に使用されていた土器の型式から、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に分けられていますが、塚原遺跡では、早期と中期の遺構・遺物が発見されています。

早期（約八～九千年前）では、まだ建物跡は確認されておらず、石囲炉・地床炉・炉穴など、焼土や焼礫が残る屋外炉が多数確認されています。早期の縄文土器は深鉢形がほとんどであり、先端が尖るなど底面が狭いものが多く、石組や穴などに据え付けて煮炊きしたものと思われます。

屋外炉（縄文早期）

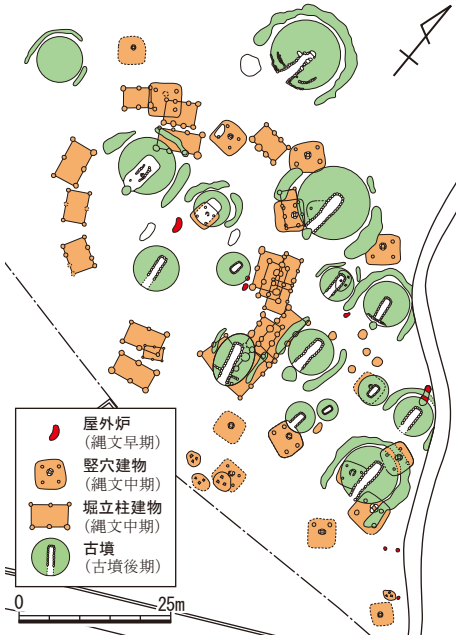
縄文土器（縄文早期）

竪穴建物（縄文中期）

中期（約四～五千年前）では、建物跡が多数確認されています。方形に床を掘り窪めた竪穴建物（十七軒）は、主に四本の柱穴と石囲炉が築かれています。掘立柱建物（十九軒）は、主に一間×二～三間の柱列から成り、平地に設置されているため、高床などを有した倉庫や作業場などと思われていましたが、現在では住居の可能性も考えられています。その他に、焼礫が堆積した集石土坑や土器片が廃棄された土坑なども発見されました。

これらの建物群は、時期差はあるようですが、中央の広場を囲むように掘立柱建物が配置され、その外側に竪穴建物が半円帯状に位置しています（環状集落）。縄文時代中期は、大規模な集落が形成され始め、規則的な建物配置が見られるようになる時期であり、集団の性格や変遷が窺われる大変興味深い事例とされています。

中期の縄文土器は、浅鉢や壺形土器などの器種も見られ、在地系、関東系、関西系など、型式も多様化しています。また、石器も多数出土していますが、特に石錘（漁網のおもり）が多く、長良川での漁が盛んであったと推測されます。



遺構分布図

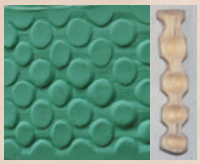
「縄文」のない縄文土器

縄文時代中期の土器（塚原遺跡）

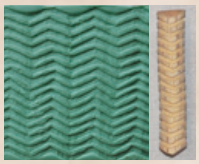
「縄文土器」は、縄を周りに押し当てた縄目文様から名付けられましたが、縄目以外の文様も多く見られます。刻みを入れたり糸を巻いた棒を押し当てる押型文、貝殻を押し引く条痕文、半裁した竹を刺したり引いたりする竹管文（刺突・沈線）、粘土紐を貼り付ける隆起線文（隆帯文）など、種類は数百とも言われます。大きな把手・突起で飾った「火焔（かえん）土器」など、その文様や装飾は地域色も豊かであり、地域や時期により型式も様々です。

撚糸文

楕円文



山形文



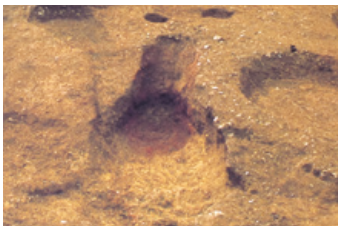
押型文の例

縄文時代

神野遺跡（神野）

津保川上流右岸の東向き緩斜面に位置する遺跡です。昭和五九年（一九八四）の発掘調査により、縄文時代の炉跡や中世の建物群が発見されています。

縄文時代の炉跡は、地床炉数基のほか、岩盤を掘り抜いて火を焚いた「炉穴」を三基確認し、東海地方では貴重な例とされています。焼土や木炭片、木の実の炭化物が残り、調理に使用されていたようです。主に貝殻条痕文を施す土器片が出土しており、縄文時代早期の遺構と思われます。



炉穴

岩井戸岩陰遺跡（武芸川町谷口小知野）

武儀川左岸に面した山塊に位置する遺跡です。崩落礫が形成した洞窟状の岩陰に遺物が散布しており、昭和四五年（一九七〇）には南山大学、平成一三年（二〇〇一）には岐阜県文化財保護センターにより発掘調査が行われました。

縄文時代早期から近世まで各時代の遺物が堆積しており、長期にわたり利用されたようです。特に石器の剥片が多く、縄文時代には主に石器製作の場、以降は祭祀の場などで使用されていたと思われます。

調査地

松原遺跡（小屋名）

塚原遺跡公園対岸の松原遺跡では、縄文時代の遺構・遺物も多数確認されています。

第一次調査では、焼けた石が大量に堆積した集石土坑が三箇所で発見されました。底面には焼土や木炭が堆積し、蒸し焼きなどが行われていた調理場と推定されています。土器は出土しませんでしたが、木炭片の科学的年代測定により、今から約一万年程前、縄文時代早期のものと思われます。

竪穴建物と思われる遺構も一軒確認しました。柱穴や炉跡は不明瞭ですが、出土土器から、縄文時代前期の遺構と思われ、現在のところ市内最古の住居跡である可能性が考えられます。

集石土坑

重竹遺跡（下有知周辺）

長良川左岸の扇状低地から中位段丘にかけて広がる遺跡です。これまでに一〇〇箇所以上で調査が行われており、縄文時代から近世に至るまで多くの遺構や遺物が確認されています。

長良川河畔に近い中西部のA地点では、縄文時代中期の竪穴建物が三軒確認されており、塚原遺跡の方形とは異なり、円形に掘り窪められた建物跡です。北西部のB地点では、遺構は不明ですが、土中に埋設された縄文土器「埋甕（うめがめ）」が出土しています。

また、北東部の裏野地区では、縄文土器片が六〇〇点近く出土しており、周辺に縄文時代の遺構が存在する可能性が考えられます。

竪穴建物（A2地点）

「埋甕（うめがめ）」は棺!?

「埋甕」は、食料などの貯蔵具の可能性も考えられますが、県内や他県の事例・研究では、人骨が出土した例などもあり、埋葬施設とも考えられています。住居内では出入口付近に埋設された例が多く、乳幼児を埋葬したか、または後世の民俗事例から、胎盤を埋めて祈念した胞衣壺（えなつぼ）との説もあります。屋外では小型で乳幼児の埋葬用とされますが、弥生時代にかけて、成人用の大型の甕棺（かめかん）も用いられるようになり、棺墓の始まりであったと思われます。

縄文時代は、土壙墓への屈葬（遺体を屈めて埋葬）が主とされますが、埋葬を含めた祭儀行為は、地域性により大きく異なります。埋甕も市内では発見例が少なく、重竹遺跡B地点の他は、弥生時代の埋甕が、重竹遺跡のA地点や地蔵下地区、大杉遺跡などにおいて発見されています。

埋甕〔弥生土器〕（大杉遺跡）

湯屋（ゆや）遺跡（板取湯屋）

板取川支流の川浦谷川左岸の狭小な段丘上に位置する遺跡です。平成二二年（二〇一〇）に市道改良工事に伴う試掘調査により発見され、翌年に本発掘調査を行いました。

調査区全般において、多くの土坑や小穴を確認し、縄文土器片や石鏃・剥片などの石器が出土しました。

建物跡は確認できませんでしたが、大形土坑のいくつかは、袋状またはV字状に掘り込まれており、獲物を捕るための落とし穴の可能性が考えられます。

出土した縄文土器片は、斜縄文のほか、隆帯文、渦巻隆起線文、半截竹管文（沈線文・押引文）、条痕文、刺突文など多様な文様が見られ、縄文時代中期、今から四～五千年程前の生活域であったと思われます。

縄文土器　出土状況

縄文土器片

調査区全景

打製（だせい）石器（せっき）から磨製（ませい）石器（せっき）へ

旧石器時代に使用された「打製石器」は、縄文時代にさらに進化し、石鏃・石匙・石錐・石斧など用途に応じて様々な器種が造られました。石鏃を用いた弓矢の普及により、狩猟の方法や効率も大きく発展したものと思われます。

また、縄文時代には表面を磨いて加工した「磨製石器」が登場し、弥生時代まで使用されます。手斧やのみのように用いた磨製石斧、木の実などを磨りつぶした磨石と石皿、弥生時代に稲穂の摘み取りに用いた石包丁などが造られ、磨製の石鏃や石錐も製作されています。中之保の若栗遺跡で出土した両頭石斧（独鈷〔どっこ・とっこ〕石）や、松ヶ洞遺跡の弥生時代の土坑で出土した環状石斧は、工具や武具と思われますが、祭儀用とも考えられています。石棒や石剣などと共に、弥生時代にかけては祭祀や儀式での石器・石製品の位置付けも興味深いものとなります。

左：磨製石斧（せきふ）
右：環状石斧
（松ヶ洞遺跡）

左：両頭石斧　右：磨石（すりいし）・石皿　（若栗遺跡）

底津（そこつ）遺跡（洞戸栗原）

縄文土器片

板取川と底津谷に挟まれた段丘面に位置する遺跡です。岐阜県文化財保護センターや洞戸村教育委員会により、これまでに三度発掘調査が行われており、縄文時代中～後期の竪穴建物十数軒や土壙墓と思われる集石土坑、中世の土壙墓などが確認されています。

対岸の飛瀬遺跡、上流の高見遺跡、下流の市場遺跡など、縄文時代の遺跡が多く残る地域です。

打製石器

底津遺跡の調査では、縄文土器片に加え石器類も多く出土しています。

弓矢の先につけた石鏃（矢じり）、皮や石に穴を開けた石錐、つまみ部を有する刃物状の石匙、土掘りに使用した打製石斧、魚を捕る網のおもりとした石錘などのほか、磨製石斧や磨石・石皿などの「磨製石器」も出土しています。

「J」のような形をした異形の石器も見つかっています。使用法は不明ですが、土製の管玉も出土しており、垂飾りなどの装身具や副葬品の可能性が推定されています。

弥生時代

「ムラ」から「クニ」へ

明治一七年（一八八四）、東京都弥生町の向ヶ丘貝塚で、縄文土器とは異なる壺形土器が発見されました。その後の各地での発見や調査により、縄文時代とは違った文化や生活が推定され、発見地名から「弥生土器」、その時代を「弥生時代」と呼ぶようになりました。弥生時代の始まりは、紀元前一〇～三世紀まで諸説ありますが、弥生文化の特徴である稲作が始まり、古墳が造られるようになる紀元後三世紀頃までを「弥生時代」としています。

弥生時代には、縄文土器より薄手で固い土器や石器などに加え、大陸から伝わった青銅器や鉄器などの金属器が使用・生産されるようになります。また、同じく大陸伝来の稲作が九州から全国に広がり、狩猟・採集の生活から農耕・牧畜の生活に変わっていきました。米などを備蓄する高床式倉庫が造られ、織物も織られるようになったようです。

こうした生活の変化は、社会の変化にもつながり、稲作の普及により定住化は定着し、次第に大きな集団「ムラ」が形成されていきます。そして、集団をまとめる指導者が力をのばし、階級差が生まれてきたものと思われます。それに伴い墓制も変化し、甕棺などを用いた集団墓から、特定人物・集団の墓を区別する方形周溝墓などの墳丘墓へと変わっていきました。集団間の争いも生じたようであり、外敵に備える環濠を設けた集落も多くみられます。

これらの生活や社会の様子は、銅鐸や土器に描かれた絵画や中国の史書にも残り、金印を有した「奴国」や女王卑弥呼の「邪馬台国」などの「クニ」の誕生も窺われます。

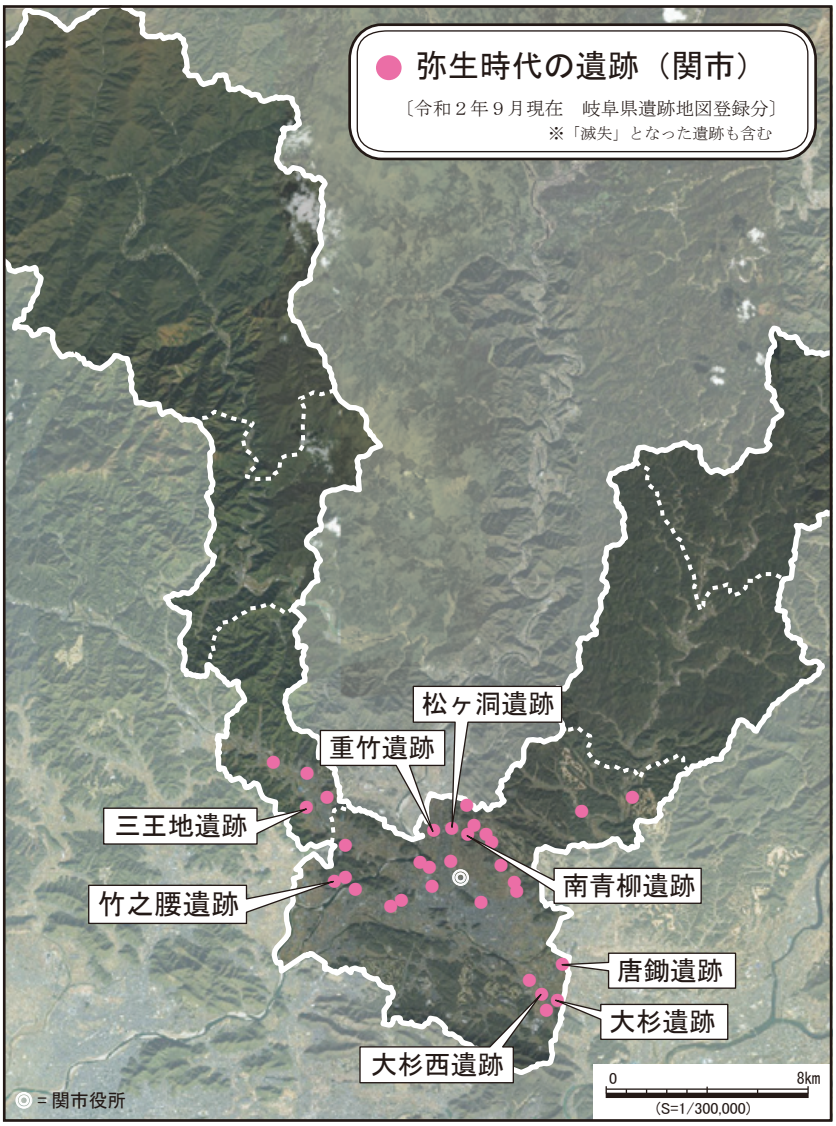
石包丁（大杉遺跡）

方形周溝墓（大杉西遺跡）

関市の弥生時代

弥生時代の遺跡のほとんどは旧関市内に存在します。上之保・旧武儀町・板取・洞戸地域では、弥生時代の遺跡登録はなく、上之保の明ヶ島や宮脇先谷などで遺物は採集されていますが、建物跡や水田跡など弥生時代の遺構は確認されていません。当初の稲作は、人工的に田圃を設けるのではなく、自然の沼地や湿地を利用したと考えられており、広い水田地が設けられる平地が生活の中心であったと思われます。

県内では、今宿遺跡（大垣市）や柿田遺跡（可児市・御嵩町）などで弥生時代の水田跡が検出されています。市内では、大杉遺跡で稲穂の摘み取りに用いる石包丁が多数出土し、竹之腰遺跡（千疋）では弥生土器を含む土層からイネの花粉が検出されています。重竹遺跡や松ヶ洞遺跡では弥生前期の土器も出土しており、稲作や弥生文化の普及は推定されているため、現在のところ市内で弥生時代の水田跡は確認されていませんが、今後の調査で発見されるかもしれません。

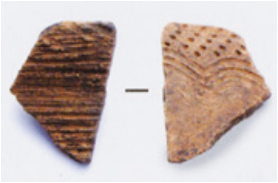


※　遺跡名は、図録や展示で紹介している遺跡のみ表示しています。

大杉（おおすぎ）遺跡（大杉・西田原）

津保川左岸の中位台地上に広がる集落遺跡です。これまでに二一次にわたる調査が行われており、古墳時代を中心に縄文時代から古代の竪穴建物を二五〇軒以上確認している県内でも有数の集落遺跡です。

弥生時代では、竪穴建物を約二〇軒、掘立柱建物も六軒確認しています。平成一二年（二〇〇〇）の第一次調査で発見した竪穴建物では、深鉢の口縁部片が出土しています。外面には条痕文を、内面には刺突の列点文と櫛描きの波状文が施され、弥生時代中期の弥生土器片と思われます。



弥生土器片〔深鉢（ふかばち）〕

南青柳（みなみあおやぎ）遺跡（のぞみヶ丘）

下有知北東部の山地から張り出した小丘陵の西側斜面に存在していた遺跡です。昭和五三年（一九七八）、グラウンド造成に伴う発掘調査で弥生時代後期の竪穴建物二軒が発見され、壺や甕、器台などの弥生土器が出土しています。

遺構外で発見された紡錘車は、糸を紡ぐための道具です。底部裏面に布目痕が残る土器が見られるなど、織物が生産され使用されるようになったものと思われます。

弥生土器〔器台（きだい）〕

紡錘車（ぼうすいしゃ）

三王（さんのうじ）地遺跡（武芸川町跡部）

武儀川右岸の井ノ山東裾に位置する遺跡です。平成二二年（二〇一〇）の調査では、弥生時代の溝や古代の竪穴建物と思われる遺構が見つかっています。

溝は一部しか確認できず、全体形や性格は不明ですが、集落を囲む環濠の可能性も考えられています。高坏、壺、甕などの土器や石器などが出土しており、弥生時代後期の遺構と思われます。赤彩を施す「パレス壺」の一部も見つかっています。

弥生土器

重竹（しげたけ）遺跡（下有知周辺）

重竹遺跡においては、昭和五三年（一九七八）及び五五年（一九八〇）の中西部A地点の調査で、弥生時代の竪穴建物七軒と方形周溝墓一基、埋甕一基が見つかっています。

竪穴建物は、方形で柱穴四個のものが多く、主に中央付近に焼土が堆積しており、周溝や貯蔵穴を有するものも見られます。出土した弥生土器から、弥生時代中期～後期の遺構と思われます。

竪穴建物（A2地点）

弥生時代は「溝」に注目

弥生時代、稲作が普及すると、田へ水を引くための水路や外敵から集落を守るための「環濠」など、様々な溝状遺構が設けられるようになります。

溝〔土層断面〕（三王地遺跡）

集落を濠で囲む「環濠集落」は、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）など多くの遺跡で確認されていますが、市内で発見された集落では、弥生遺跡の調査事例自体が少ないこともあり、現在のところ明確な環濠は確認されていません。

墓域を溝で囲む「方形周溝墓」は、重竹遺跡A地点のほか、大杉西遺跡では４基確認されています。墳丘の大半は削平されており不明ですが、弥生土器片や土師器片が出土しているため、弥生～古墳時代の墳丘墓と推測されています。溝の機能や目的には諸説ありますが、住居近辺に埋葬していた縄文時代に比べ、墓域を明確に区画していくようになったものと思われます。

その他、唐鋤遺跡（東田原）でも弥生土器を含む溝状遺構が確認されていますが、調査範囲も狭くその性格は特定できていません。弥生時代の溝状遺構の性格を解明していく今後の調査事例に期待がもたれます。